
砂糖蜜

まったりorz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂糖蜜

【Nコード】

N2470G

【作者名】

まったりorz

【あらすじ】

感覚的な言葉の羅列です。連載ですが、一つ一つに繋がりは無いです。

さながら

放り投げた言葉の片隅に
噛み合わない生温い欲望は絡んで
諦める人はいつも仰向けになるけれど
どこを探っても希むものは掴めない

例えば二度血を流したその人は
涙を流す事は無かったけれど
三度目はきつと涙を流すはずで、
三度目はないかもしれないけれど

さながら膚を泳ぐ金魚の尾ひれ
白銀の鱗を削り落とすと
零れ落ちて嘘になった飛沫と共に
三つ目の脱皮を迎えた（誰かがそう決めていたはずだ）

馴染めなければ離れるだけだ
息継ぎのように、相対的な死を目指す
横たわる人は目蓋を針で縫いつける
簡単すぎるもの程、情緒が無いから

薄く出来た水の膜を流れる糸が
溶けているようで膚を伝うのは（楽しめと誰かが云ったはずだ）
乾いた砂が膚を脆弱にしたけれど
潤ませるだけの涙をその人は持っていないらしい

嘘吐きな標識のせいなのか

理解力が足りないのか

安易な精神の問題なのか

首を絞める綿糸が柔らかすぎるのは（いや、もっと、別の何か――

――

――さながら処女の夢から覚めた心地だ

えそらごと

ぶあつい雲を喰いちぎっている黒い犬が尖らせた赤い舌に舐められている筋肉質な足の指先に跪いている私の両手の指の隙間から生えている濡れた雑草が風に揺らめいて切っ先で脰脛に小さな傷を残したところからぼとりと艶やかな赤い珠が視界を濁らせた午前二時、雲間が白くなる前にと焦燥感にかられる私の睫から抜け落ちた薄赤の涙が汚した胸の膨らみの先から透明な闇が続く概念の秒針にはたと立ち止まる人の孤独な喧騒に笑みを浮かべている魚の棲家から水が溢れ出してゆくとき、

髪を濡らすものが何か分からないまま、私は私が何か分からないまま、いつも赦しを請うのだ。

（——何でもない何か、存在でも行為でも感情でもない、私と呼ばれる何かに対して、いつも私は同じ言葉を繰り返し、その真意すら忘れ、また同じ言葉を繰り返し、それは観念に似た意味のないものへと変容し、停滞する）

ひとつのただの小石の形へと姿を変えた言葉を地に落として、まるで意味を持たない音の羅列になってしまった思考の断片から生まれるものは全て架空の共感だったというのなら、

「分からない」

「もつとちゃんと説明してよ」

「順序だてて、話してみて」

「ゆっくりでいいから、落ち着いて、皆に分かるように」

不恰好な四角の部屋には一人の男と二つのマグカップと机と椅子とパソコンとボールペンとカレンダーと時計とそれから――「皆」には人間以外のものも含まれるのだろうか――あいにく日本語以外は使えないのだけれど、「皆」は日本語が分からないのかもしれない、そんなはずはない、男は日本語を使っている。

意味を履き違えていたと気付かされた頃には私の思考は誘導されて別の何かになっているのだろうか

男と同じ目をしたまま、口角をあげる

乾いた髪の上、白い魚が群れをなして空へ消えてゆく

よまいつと

首筋に滲む汗は 妙に甘い 舌が触れる度 痺れている
口の中は苦味が纏わりついたままだからだ

海水に浸っている 乾いてしまえば肌には馴染まないそれに
普段よりも密度の高い息が 私の髪を湿らせている

嫌いなもの？

好きだと思う？

じゃあ何で？

貴方がそれを聞くの？

意図と意図の間 繊維は雫を吸い取り滲む 滲んで変色し重たげな
顔になる

睦言とは程遠い 問いに問いを重ねて 鼻で笑う

茂みの中 迷い込んでいる 白い涙 滲ませた迷子
導けばいいのか 慰めればいいのか 私は知らない

苦しんでいる、と思う

退屈なりにそう思わなければやってられない けれど

寄り添えない体温がある 私は私を抱いている

たぶん、それは ひとりよがりだ 何故だか 苦しい

終わらせてしまえばきつと何も残らない

そう、言い聞かせる そうだと知っている いつか後悔する事も

繰り返すけれど連続ではないのだ ああ嫌だ
かりそめの触れ合い 自分のための施し どこかピンとこない

行き場をなくした熱は 彷徨って冷えるから

何も残さないで 何か残して 後悔しないように 後悔するくらい

泣き出した体を 滑り出した歯車を 苛めてやりたい気持ちになる
そして何だか むしように 守りたくなる

憂鬱に浸っている 恍惚の先には出会うはずのそれに
昔より少し物分かりのよくなった 私の体を覆っていく

どうして私は私なのだろう ああ嫌だ

にべもなく

雨が降ったね

雨が降ってるね

そういえば、と言葉を続けようとして

彼女は笑った 寂しそうに

ああ 悲しいのだ と思う

最近 というよりは もう ずっと

言葉が途切れることが 多くなった かもしれない

それは 気にするほどのこと ではない かもしれない

なぜか 指先が 湿っている

朝露を 帯びた あの小さな花は 何だっけ

そう 薄紫の 星型の花

名前は はじめから 知らない けど

ずっと 幼い頃から よく知っている花

彼女の喉に は それによく似た石が 埋まっている

小さくて 朝になると ふるふると 揺れる

そういえば、と 彼女は不意に呟く 微笑む

目元は 寂しくて 優しい それが 悲しい

そういえば そういえば そういえば、と 続ける 何だっけ

爪の中に 三日月を 飼っている

けれど 取り出そうとすれば 血 が 流れる

雨のせい だと 言えば それまでだけれども

唇 を 尖らせた 蝶の羽 が 雨に濡れている

重たい羽 を 背負っている そういえば、

彼女は なんでもない 口振りで 繰り返す

瞬きのたび 重たげに 睫毛 が 揺れる

まるで それすら 他人事みたいに 言う 言葉が 途切れ、る

小さくて それは 悲しいこと だと 思う

晴れてきたね、 彼女は それは 仕方のないことだ と 笑う

傘をさすのを 忘れていた けれど

指先に 溜まった 雨の名残

白い太陽が ふるふると 落とす

そして 繋がらない 言葉に ただ 笑いかえす にべもなく

あのひから

ばらばらというよりはもつと衝動的な何かです

たまに普通の人の顔をして

わざとらしい笑顔を浮かべて

ひとごみにまぎれてみると

さびしい というよりは しにたい というよりは どうしよう

もないかんじの

夜の帷に縋りつきたくなるような

一足とびに 白線の外側に 迷ってしまうものです

迷子は加被のどちらかに選別されます

なんて恐ろしいこと 教えてもらったのは何時だったか

ひとり 病室で ひitori 実験をします

なにかしなきゃいけない けれど なにかしなきゃいけない

暗黙のルール 温かい苺 砂糖蜜 甘くて苦い

かちかちと削りとるのです 私のようなものを

音をたてて けれど密やかに 私はばらになるのです

それはほんとになんでもよくて いきものじゃなくていい

私は少しずつ無くなって欠片になるのです

昨日、という概念がぼつかりと抜け落ちていきます

時間のこと 考える時間 増えたような気がするけれど

まるで海を隔てた遠い国を考えるように

私の思考はふわふわと何処かへ 離れてゆきます

あのひ、さようならをしたのは 誰だっけ

あのひ、指きりをした約束は 何だっけ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2470g/>

砂糖蜜

2010年11月18日11時29分発行